防災・減災のページ

むすび塾

高知新聞社と共催　＠高知・潮江南地区

災害弱者の避難 検証

津波に備え学校・住民連携

東日本大震災の教訓を今後に生かすため、河北新報社は2月20日、巡回ワークショップ「むすび塾」を高知市潮江南地区で開いた。高知新聞社（高知市）との共催で通算52回目。東北大災害科学国際研究所、電通と共同展開する津波避難モデル事業「カケアガレ！日本」と連動し、学校と地域住民が避難訓練をした。話し合いでは、参加者らが地域や家庭の備えについて意見を交わした。

高知市潮江南地区の避難訓練は雨が降りしきる中で実施し、要援護者と小学生の親子ら約30人が参加した。南海トラフを震源とするマグニチュード（M）9・1の巨大地震が起き、20～30分後に5㍍以上の津波が押し寄せると想定。避難先、経路などを検証した。

車いすを利用する川上観世さん（19）の避難をサポートする訓練では、近所の村上龍一さん（68）と横山顕介さん（67）が車いすを押して高台を目指した。3人は海抜26㍍地点に13分で到着。村上さんは息を切らし「悪天候の時には坂道を登るのがさらに大変になる」と心配した。

潮江南小5年の富永さらさんん（11）と1年のかれんさん（6）姉妹は、親の居る自宅から離れて公園で遊んでいた時に、地震に遭った

と設定した。

姉妹は雨がから身をすった後、公園を出発。「土砂崩れがありそう」と高台を避け、潮江南小に向かった。一足先に学校に避難した父栄司さん（40）と約10分後に合流し、そのまま学校にとどまった。

さらさんは「どこに避難するか、妹とは意見が分かれた。前に父と学校に避難しようと話していたことを思い出した」と説明した。

潮江南地区には高台へと続く上り口が20カ所以上ある。ただし、道幅が狭かったり、急な配だったりする避難路が多く、道路脇にブロック塀が設置されている箇所も目立った。

児童が自ら避難先を考えて行動した避難訓練

ビル少なく住宅が密集

南海トラフの巨大地震による高知市内の想定死者数は最大1万2000人、建物被害は全壊で最大5万2000棟にも。

潮江南地区は約4300世帯、8500人が暮らす。川と地区の高齢化率は29％。潮江南小には児童363人が通う。町内会や学校などは潮江南防災連合会を組織。高齢者を含めた幅広い年齢層の避難訓練などに取り組んでいる。

避難訓練で高台の避難先を目指す車いすの住民と支援者

■むすび塾に参加して――高知・潮江南地区

【今後の課題】介護用車いすは重く、動かすのが大変。避難・救援はこうした点も考慮する必要がある＝潮江南防災連合会・川上観世さん（19）

【今後の課題】高台避難の際、要支援の高齢者を車いすに乗せて、急な坂を短時間に上がれるか不安だ＝北竹島第6町内会会長・横山顕介さん（67）

【訓練を終えて】小学校で子どもたちと無事合流できた。日頃から家族の話し合いが必要だと感じた＝会社員・富永栄司さん（40）

【訓練を終えて】土砂崩れを考えて、山ではなく学校に避難した。きょう聞いた話を友達にも伝えたい＝潮江南小5年・富永さらさん（11）

【訓練を終えて】ブロック塀の危険性はこれまで実感していなかった。地区全体で対策を考えたい＝潮江南防災連合会事務局長・川上政寿さん（48）

【訓練を終えて】要援護者が無事避難できるように、拠点内で横のつながりを大切にしたい＝竹島町町内会長・寺本正夫さん（69）

【防災教育】災害で最悪の状況になっても子どもが生き延びられるように、避難訓練に取り組んでいる＝潮江南小教頭・野村ゆかりさん（59）

【今後の課題】もっと多くの若い世代が避難訓練に参加するように仕組みやきっかけづくりを考えたい＝高知市地域防災推進課主事・山本美咲さん（24）

訓練記録 行動振り返る

東北大災害科学国際研究所所長　今村　文彦さん

避難訓練は災害に備えていくという時の判断力をつけ、経験を共有することが目的になる。訓練を記録することも重要。記録を基に各自の判断や行動を振り返り、参加者で課題を指摘し合うことが大切だ。

複数の避難先を考えてほしい。火災や地滑りはないかどうか、外の様子を確認し、状況に応じて行き先を決める姿勢が求められる。地震変動により、津波が予想した時間よりも早く到達することがある。道路脇の水路などから水が入ってくる可能性もある。避難解除のタイミングも事前に地域で検討すべきだ。

■専門家から

ブロック塀対策が急務

減災・復興支援機構専務理事　宮下　加奈さん

潮江南地区では高台に逃げても広場がない。せっかく津波から逃れても、雨をしのぐ場所がないため、低体温症になる恐れがある。

住宅や避難経路に並ぶブロック塀の対策も急務だ。このままでは地震で倒れた際に道をさぐる可能性がある。少しずつフェンスや生け垣に替えたり、倒壊ブロック塀を排除する手だてを考えたりする必要がある。

防災教育は子どもの将来のために重要だ。授業参観日などを活用し、親子で学ぶ場を設けてはどうか。防災マップを子どもに作成させてみてもいい。地区の危険箇所を把握できる。